ウメとウグイスの関係

取り合わせのよい2つのものを例えて、「梅に鶯」という成句があります。また、ウメとウグイスは、初春の象徴として万葉集でも詠われたり、花札や絵の題材としてもよく使われたりしています。

ところが実際には、ウグイスは花の蜜ではなく昆虫を食べています。花の咲いたウメの木を好んでよくやって来るのは、花の蜜を吸いに来たメジロであることが多く、園内のうめ園でもメジロやヒヨドリがよく見られます。一般的にうぐいす色と言われる色はメジロの体の色に近いこともあり、ウグイスとメジロはよく混同されているようです。

土屋光逸「梅鶯」

よくある質問Q&A

Q. 蠟梅（ロウバイ）ってウメの仲間？

A. 12月下旬から2月にかけて、ロウバイは、黄色く香りの良い、ウメの花のような小さな花を咲かせます。冬の寒い時期に咲くこともあって、注目される植物です。

ロウバイは、ロウバイ科に属し、ウメ（バラ科）とは全く違う仲間の植物。名前の由来は、「蝋梅」と書くように、ウメに似た花で、ろう細工のような光沢と質感を持つこと、臘月（陰暦　の12月）にウメに似た花をつけること、など諸説あります。

［写真］左）ソシンロウバイ　右）ロウバイ

うめ園のご案内

■お問い合わせ
東京都立 神代植物公園　指定管理者：(公財)東京都公園協会
〒182-0017　東京都調布市深大寺元町5-31-10　TEL 042-483-2300

神代植物公園の江戸園芸植物

ウメのしおり

「ウメ」ってどんな植物なの？

ウメは、バラ科サクラ属【*Prunus*】の落葉小高木です。
中国や日本を中心に古くから観賞用として栽培されています。原産は中国ですが、薬用の実ウメが弥生時代前期に水田稲作技術と共に日本に渡来したといわれ、奈良時代には花といえばウメを指すほど人気を博し、貴族などの庭園で楽しまれました。万葉集にも多く詠われています。

また、江戸時代にはたくさんの品種の育成・改良が行われ、現在日本には500種類以上のウメの品種があるとされています。

ウメ、うめ、梅…なまえのこと

ウメの語源は一説には、中国語の「梅」（マイ、メイ）の文字を当時の日本人は「ンメ」のように発音していたことから「ムメ」、「ウメ」へと変わっていったといわれています。もう一説には、中国から伝来した薬用のウメの実「烏梅（うばい）」が、中国語で「ムエイ」と発音されていたものを、日本人が「ムメ」、「ウメ」と聞き取ったといわれています。これらの説の「ムメ」はウメの学名 *Prunus* ***mume*** にも現れてます。

花ウメの分類　―系と性の分け方―

現在主流とされるウメの園芸上の分類※では、実の採取を目的とする「実梅（みうめ）」と、花の観賞を目的とする「花梅（はなうめ）」に二分し、さらに、花梅は野梅系、緋梅系、豊後系に分類されます。
また3つの系は、花色や枝の芯（髄）の特徴によって、9つの性に分けることができます。

※ 分類方法、系、性の特徴には諸説あります。

野梅系（やばい）

・原種の野梅から変化した原種に近い丈夫な系統。
・葉はやや小型、枝つきが細かく、枝の断面（髄）は白色の種類。
・二百数十品種あるウメのうち、過半数がこの系統。

- **野梅性**（やばい）
  - 花：花は白色、淡紅色、紅色がある。変異性に富み、香気高い。
  - 枝：細い枝が密生し短枝は時にとげ状になる。若い枝は緑色だが日光を受けて紅色となる。枝垂れ性もある。
- **紅筆性**（べにふで）
  - 花：蕾の先が筆の穂先のように尖って紅色になる。花色の多くは淡紅色や白色で、弁裏が紅色のものが多い。
  - 枝：枝の特徴は野梅性に似る。葉痕（節）の部分がふくれる。病気にやや弱い。
- **難波性**（なにわ）
  - 花：花は薄紅色から紅色の八重。
  - 枝：枝の特徴は野梅性に似る。葉は細い。
- **青軸性**（あおじく）
  - 花：蕾は緑白色で、花は青白色。
  - 枝：枝はやや太く、若い枝は日光を受けても赤味を帯びず、常に濃緑色。

緋梅系（ひばい）

・枝が細く、枝の断（髄）が紅色の種類。
・花は紅色が多く、まれに花が白色のものもあるが、髄が赤いものはこの系統。

- **紅梅性**（こうばい）
  - 花：花は明るい紅色。
  - 枝：枝の断面（髄）が紅色で若い枝は日光を受けて軽く緑褐色となるが、時には緑色を帯びたものもある。
- **緋梅性**（ひばい）
  - 花：花色は紅梅性より濃い紅色。深紅色か黒味を帯びた紫紅色のものもある。
  - 枝：枝の断面は紅梅性よりさらに紅色が濃い。若い枝は日光を受けて暗褐色～黒褐色になる。
- **唐梅性**（とうばい）
  - 花：花は薄い紅色で、時間が経つと退色して花弁に脈状の赤い筋が出る。花柄が一般に長く、下向きに咲く。
  - 枝：枝の断面（髄）が紅色で、若い枝は日光を受けて軽く緑褐色となるが、時には緑色を帯びたものもある。

豊後系（ぶんご）

・枝は太く、枝数がやや少ない。秋になると葉柄と枝先が紫紅色に色づく。
・葉は大きく、丸みがある。
・花は大きく、淡紅色のものが多い。萼片は反り返り、萼筒が壺形。
・果物のアンズとの交雑種と考えられている。

- **豊後性**（ぶんご）
  - 花：花は大輪で、一般的に淡紅色。
  - 枝：枝が太く、枝数が少ない。葉は大形で丸葉、表面に毛がある。
- **杏性**（あんず）
  - 花：花は中輪で、淡紅色が多いが白色もある。遅咲きのものが多く、香りは少ない。
  - 枝：枝は豊後性よりもやや細く、葉は豊後性よりも小さめで、無毛。秋に美しく紅葉する。

あかい梅、しろい梅

一般的に、花色の白いウメを白梅、赤いウメを紅梅と呼びますが、これは園芸分類的には正しくありません。

花の観賞を目的とする野梅系、緋梅系、豊後系のうち緋梅系の種類のウメは、花だけでなく枝や幹の芯（髄）も赤く、これこそが本当の『紅梅』と言えます。花は赤色や桃色に見えても、枝の芯（髄）までを見て、この部分が赤くなければ、正確には『紅梅』とは言えないのです。

また、‘輪違い（りんちがい）’という品種は、‘思いの儘（おもいのまま）’という別名があり、一本の木に赤色と白色の両方の花を一緒に咲かせますが、こちらは野梅系に分類されます。

うめ園のご紹介

神代植物公園のうめ園には約70品種のウメが植栽されています。なかには、『韻勝園梅譜（いんしょうえんばいふ）』（著者 春田四郎五郎久啓）などの、江戸時代に成立した梅譜や園芸書にも記載される貴重な品種もあり、様々な品種をお楽しみいただけます。

神代植物公園では例年、1月中旬頃から早咲きの品種が咲き始め、2月中旬頃に見ごろを迎え、花の少ない時季に園内を彩ります。当園で見られる品種の一部をご紹介します。

野梅系

冬至（とうじ）
早咲きの中で最も一般的な品種。冬至の頃に咲くことから名付けられた。（野梅性）

八重寒紅（やえかんこう）
野梅性の中で最も紅が濃い。開花が早く、正月頃には咲き始める。（野梅性）

月影（つきかげ）
一重で花は青白色、萼は純緑色。「韻勝園梅譜」の春田四郎五郎久啓の作出。（青軸性）

実梅

白加賀（しろかが）
実ウメの主要品種。古くから梅干し、梅酒用として栽培される。（実ウメ）

緋梅系

大盃（おおさずき）
紅色が美しく気品があり、開花も早く、一重の紅梅としては一般的。（緋梅性）

蓮久（れんきゅう）
花は薄紅色で裏側が紅色を呈す。蕾は濃紅色で開花すると薄くなる。（緋梅性）

豊後系

一の谷（いちのたに）
一見すると白色だが、ほのかに紅が残る。アンズに近く、比較的よく結実する。（豊後性）

白牡丹（はくぼたん）
名前は、大輪で牡丹のように見えることにちなむ。明治時代の銘花三牡丹のひとつ。（豊後性）

高岡の月知梅と湯の宮座論梅

つつじ園の一画、池の前の三角休憩舎の隣に「高岡の月知梅」と「湯の宮座論梅」があります。
この2つの梅は、ともに宮崎県内の梅の名所のもので、昭和50年に宮崎市からの好意で特別に寄贈されたものです。宮崎県内のそれぞれの原木（梅林）は、巨樹、老樹として国の天然記念物に指定されており、後世に長く伝えていきたい、大切な樹木です。

高岡の月知梅（たかおかのげっちばい）

花は蕾の時、わずかに桃色を帯び、八重咲きで芳香がある。原木の樹齢は400年以上。
延宝5年（1677）薩摩藩2代藩主、島津光久が「月知梅」と命名してから広く知られるようになった。

湯の宮座論梅（ゆのみやざろんばい）

花は白色で、一重咲き。原木の樹齢は600年以上。座論梅の名の由来は「ザロミ」という梅の種類から名づけられたとも。徳川時代に佐土原、高鍋両藩に梅林の所有権争いが起こり、両藩士がこの地で出会い座して論議したことからともいわれている。